

# 学会報告

## 日本経済学会2004年度秋季大会

藤 栄 剛

2004年9月25日と26日の両日にわたって、岡山大学（岡山市）で日本経済学会2004年度秋季大会が開催された。

本大会では大きく個別報告、招待講演、会長講演、パネル討論、中原賞講演の五つが行われた。最近の当学会の特徴は、筆者が初めて参加した頃に比べて、大学院生の報告が増加した点をあげられるのではないかと思う。筆者と同年代の研究者が報告を行っている姿に接することは刺激になる一方で、あたかも自分の報告を聞いているようで痛ましい気分になることもある。そうしたせいかわからないが、大学院生の報告には括弧付きで指導教官の名前も付されている。これは、一定の質の保持と指導者責任の明確化を図ろうとする一つの試みと思われる。

個別報告はいくつものセッションごとに分かれて並行的に催されている。近年は「介護」、「実験経済学」、「集積の経済分析」などの新しいセッションが登場している。また、従来から存在する「環境」や「医療経済」セッションの数は増加傾向にある。「介護」や「医療経済」セッションは労働経済学等の応用経済学分野で用いられている手法を援用した報告が多く、これまで用いられてきた手法が新たな分野の分析を行う際にも有用であることを示している。

筆者は「医療経済」や「労働市場の実証分析」などのセッションを中心に聴講した。これは計量的手法の活用上の工夫やそれら研究報告から筆者の研究に対して何らかのアナロジーが得られるのではないかと考えたからだ。

労働経済学や開発経済学などの応用経済学分野における報告の特徴は、個票データを用いた実証分析が大きなウェイトを占めている

ことである。個票データが有する情報を最大限に活用する分析手法は、最近20年間で格段に進展している。また、分析パッケージの普及に伴って、こうした分析手法の利用は容易になった。それゆえ、個票データ、たとえば「賃金構造基本統計調査」などの官庁統計の個票データを用いた研究が多数行われており、中には数万のデータを用いた分析の研究報告もあった。これらの分析では、集計値で得られない情報量が織り込まれることから、より有益な情報をデータから引き出すことが可能となる。個票データを用いた分析手法については、様々な雑誌で紹介されている（たとえば、北村行伸「ミクロ計量経済学とは何か」『経済セミナー』、No.584、2003年9月、日本評論社、pp.31～35。）

一方で、農業経済関連の学会では、個票データを利用した研究報告はあるものの、研究者が独自に調査・入手したものが大半であり、官庁統計、たとえば農業センサスの個票データを用いた分析は極めて少ない。研究者の間で個票データの有効利用により大きな関心が払われても良いように思われる。

また、上記の報告セッションでの余談として、なかなか官庁統計を利用させてもらえない、許可を得るまでに大変時間がかかったなどの苦労話を耳にすることが多い。プライバシー保護などの観点から、データ利用には慎重が期されるべきであるが、これらのデータの分析結果において、プライバシーが侵害されるような表示形式はまずない。また、大規模な個票データを用いた分析は有益な政策的含意に直結する研究が多いように思える。データ有効利用の観点から、研究者が個票データを利用しやすい環境を整えることも重要ではないかと思われる。

なお、当日の報告論題や要旨は <http://www.e.okayama-u.ac.jp/jeaf2004/program.html> に公開されている（2004年12月28日現在）。また、パネル討論や中原賞講演の内容は、「現在経済学の潮流」と冠するタイトルで東洋経済新報社から毎年発刊されている。したがって、学会の詳細な内容は上記の情報源をご覧ください。次回は6月4日、5日に京都産業大学（京都市）で開催される予定である。